

〔運動色葉集比〕比叡山

枝山始日

〔書言字考節用集二編乾坤〕比叡山天台山、艮岳、台岳、北嶺並同江州志賀郡本尊藥師、鎮守山王、

而已、

〔倭訓栞前編二十五〕ひえ、日吉をひえともいふは、住吉をすみのえといふが如し、舊事紀に日枝と懷風藻に稗叡、山と見えて、麻田ノ連陽春が作を見れば、傳教より前に此山を開きしと見えたり、東鑑に金子山といふ、三代實錄に大比叡神小比叡神と見ゆ、大嶽を大ひえといひ、西塔と横川と間を小ひえといへり、扶桑明月集に崇神天皇元年甲申近江國滋賀郡小比叡東山金大巖傍天降矣と見ゆ、今山王と呼は、天台山の地主の金毘羅神を、山王と稱せしをもて、傳教大師延暦寺を建し後、七社を比して名くるなり、佛祖統紀道邃傳附錄に、日本國最澄遠來求法、泛舸東還、指一山爲天台、創一刹爲傳教と見ゆ、日枝の坂下に、福成明神の社あり、是傳教大師入唐の時の從者に舟幅成といへる者ありし事、入唐の時、天台山拜巡の路引の一紙に見ゆ。

〔類聚名物考地理十三〕比叡山 ひえのやま 又日吉 又日枝 近江國

比叡、稗叡は假名なり、本は日吉と書り、是も假名の訓なり、日吉山の神を、今は日吉と訓て、山をば日吉の訓なるを忘れて、比叡を正字と心得て、俗にハ字のまゝにヒエイと云ふ又は叡山なども云ふは、いよ／＼誤りを重ねしなり、住吉も、古へすみのえにて、吉をエの假名に用ゐたり、今も吉方をエホウと訓は、音訓相交へたれども、吉の訓は古へをうしなはざるを、俗には得方とさへ書たがへたり、この類甚多し、心を付ておろそかに見る事なけれ、大ひえ小ひえの山は、一山の中にて、嶺の大小によりて云ふなり。

〔國花萬葉記二下〕比叡山 王城の丑寅也行程三里半也京極今出川小原口よりかはらへ出、松が崎の東に、山はなと云村へ出る、修學寺より雪母坂越に道あり、難所也又直に高野と云所へ出、矢背の里より行道すなほなり、矢背より六十丁の坂道也、此山の名、大比叡、又日枝、大嶽、都の富士、鷲、